

ポーランド語における受動表現：日本語との対照から

クリコフ アガタ

Konstrukcje bierne w języku polskim: porównanie z językiem japońskim

Agata KULIKOW

Streszczenie pracy

W języku japońskim strona bierna jest stosowana często i szeroko. Ma to związek z brakiem ograniczeń gramatycznych, które nakłada na formy strony biernej język polski (możliwość tworzenia imiesłowów biernych jedynie od czasowników przechodnich) i zasadą zgodności podmiotu w zdaniach złożonych, a także skłonnością do zachowania jednej perspektywy w zdaniu. Wpływa to na popularność form gramatycznych takich jak czasowniki posiłkowe *-te kuru* czy benefaktywne (*-te morau*, *-te kureru*), a także właśnie form strony biernej, chętnie w tym celu stosowanej.

W języku polskim natomiast nie tylko imiesłowy bierne obwarowane są ograniczeniami gramatycznymi, także zasada jednakowej perspektywy zdania nie jest przestrzegana bezwzględnie, podobnie wypowiedzenia złożone nie wymagają jednakowego podmiotu w poszczególnych zdaniach. Mocno rozwinięte są za to (w przeciwieństwie do języka japońskiego, którego gramatyka nie pozwala domyślać się podmiotu z formy czasownika) zdania bezosobowe. Zestawienie tłumaczenia powieści *Tańcz, tańcz, tańcz* (tłum. Anna Zielińska-Elliott) Harukiego Murakamiego na język polski z jej japońskim oryginałem wykazało, że niektóre z konstrukcji bezosobowych przejmują funkcje strony biernej w polszczyźnie. Zwłaszcza zdania bezosobowe kończące się na *-no* i *-to* i zdania bezosobowe z *się* są używane obecnie w polszczyźnie w sposób podobny do strony biernej – co więcej, chętniej niż zdania bierne, które wielu użytkownikom języka polskiego wydają się formalne i sztywne. Warto jednak podkreślić fakt, że w funkcji opisu rzeczywistości (jak opisy wnętrz) strona bierna pojawia się stosunkowo często, zwłaszcza w literaturze – choć nadal w analizowanym materiale było o wiele mniej przykładów sentencji biernych w języku polskim, niż w japońskim. Różnice te można tłumaczyć strukturą i gramatyką obu języków, z których jeden wydaje się woleć tak zwane wyrażenia unbounded (Ikegami, 1981), drugi zaś – bounded, a także obecnością i znaczeniem w języku polskim zdań bezosobowych, w których autor jest skłonny widzieć formy gramatycznie zbliżone do strony biernej.



目次

ポーランド語における受動表現：日本語との対照から

1 はじめに

1.1 動機づけと問題提起

1.2 先行研究

1.2.1 日本語における受動文の分類

1.2.2 ポーランド語の受動態

1.3 用語について

1.4 ポーランド語について

2 研究目的と方法

2.1 資料選択

2.2 研究方法

3 調査結果

3.1 日本語の受動文がポーランド語に受動文で訳されるパターン

3.2 能動文として訳されるパターン

3.3 特殊な能動文の例

3.4 意識の例について

4 分析

4.1 それぞれの言語において好まれる受身文の性質について

4.2 受身文がポーランド語において用いられにくい要因

4.3 両言語の性質：視点重視の言語と主語述語関係重視の言語

4.4 名詞句階層にみられる動作の方向性による制限

4.4.1 Silverstein の名詞句階層と態：日本語

4.4.2 ポーランド語における名詞句階層と動作の方向性

4.5 動作主の脱焦点化表現

4.5.1 非人称文

4.5.2 不特定主語の能動文

4.5.3 oni 構文

5 結論

資料

参考文献

ポーランド語における受動表現：日本語との対照から

1 はじめに

1.1 動機づけと問題提起

日本語の受身は、世界の言語の中でも特殊であり、日本語学習者にとって習得が最も困難な項目の一つとされている。母語でない言語を専門とする研究者は、自分自身の学習上難しかった形式を研究対象として選ぶことが多いと言われるのだが、筆者の場合はまさにその通りである。日本語を外国語として長年学んできた筆者にとっては、日本語の受身との出会いが非常に印象深く、母語を見直すきっかけにもなった。

受身が頻繁に使用される日本語と比べ、ポーランド語では受動構文の使用が比較的少なく、能動表現が好まれると予測される。このような言語事実には、視点一致の原理の有無など両言語の性質に基づく様々な要

因があるのだが、中でも大きいのは、受身の機能を担っているその他の受動表現の存在であると考えられる。

本稿では、ポーランド語と日本語の実際のテキストを使用して、ポーランド語と日本語における受動表現について考察していく。

1.2 先行研究

1.2.1 日本語における受動文の分類

多くの研究者が、日本語の受動態を三つに分類する立場をとっている。その三つとは、対応している能動文の主語の降格（ガ格→ニ格）と目的語の昇格（ヲ格またはニ格→ガ格）によって形成される直接受身、目的語そのものではなく、目的語の持主（場合によって家族や友人でも）の昇格（ノ格→ガ格）によって作られる持主受身（中間的受身）と対応している能動文がそもそも存在しない間接受身であるが、(1) b, (2) b

と(3)がそれぞれの例である。

直接受身

能動文：(1) a 次郎が太郎を殴った。

受動文：(1) b 太郎が次郎に殴られた。

持主受身

能動文：(2) a 母親が花子の日記を読んでしまった。

受動文：(2) b 花子が母親に日記を読まれてしまった。

間接受身

能動文：(3) a 隣の人が一晩中ピアノを弾いていた。

受動文：(3) b 隣の人に一晩中ピアノを弾かれた。

(1)－(3)は筆者作例

直接受身は、ヨーロッパ諸語も含め世界の多くの言語が有する最も一般的な言語形式であり、(2) b のような持主受身も、韓国語やモンゴル語など、日本語以外の言語でも見られる。しかし間接受身は、日本語特有の形式であると言えそうだ。

以上の例からもわかるように、直接受身を作ることができるのは、目的語がヲ格または二格で現れるいわゆる他動詞のみである¹⁾。持主受身も同様だが、間接受身の場合は、(他動詞と限らず)意志的自動詞も受身形をもち、使用の幅が非常に広い。唯一間接受身にならないとされるのが、非意志的自動詞である²⁾。

文体の面でも、受動文の使用によって表現が硬くなるといった制限が(あまり)なく、特に間接受身が日常会話でも使われることが多い。

ただし、意味の面では、例文(3) a と(3) b も示唆しているように、中立的な能動文に対してはた迷惑の意味が生じるのが間接受身の重要な特徴になる。

日本語受身文の特徴やその特徴をもとにする下位分類は、明治維新前後の時代から今日に至るまで数多くの研究者によって論じられてきたが、主な研究として三上や川村の研究等が挙げられる。

1.2.2 ポーランド語の受動態

受動態はポーランド語では最も基本的な文法カテゴリーの一つであるため、ポーランド語の文法を扱う専門書や参考書の全てが、ポーランド語における受動態の問題に触れていると言っても過言ではなかろう。しかし、その多くが短い記述に止めている。その中で再帰代名詞 *się* による非人称文と受動態の共通点まで扱っているかなり詳しい記述で目立っているのが Kaleta (1995) である。Oesterreicher (1926) は受動形容分詞をテーマとする専門書である。Klimonow はヴォイスの問題について複数の論文を出している。(Klimonow 1959, 1960, 1962)。Śmiech (1971) は現代ポーランド語における動詞アスペクトについての専門書だが、アスペクトとヴォイスは厳密な関係にあるため、受動態の問題にも触れている。

ポーランド語におけるヴォイスの問題を扱う研究の中には、他のスラヴ語との対照研究が多くあるが、残念ながら日本語との対照を試みるような文献は見解の限らない。日本語で書かれた文献の中にも、東京外国語大学によって出版されているもの以外ポーランド語日本語対照の文献はほとんどないというのも現状である。

日本語によるポーランド語に関する参考書、教科書でも当然、ポーランド語における態の問題が扱われる。本稿の執筆にあたって筆者は主に『ポーランド語の入門』(1973)と『微笑んでポーランド語』(2006)を参照した。

1.3 用語について

本稿では、日本語学と統一するため『ニューエクスプレス ポーランド語』(2008)の用語を使用することとするが、表1で『ポーランド語の入門』(1973)で用いられる一部の用語を記しておく。

表1 ポーランド語学における用語

『ニューエクスプレス ポーランド語』	『ポーランド語の入門』
受動文、受身文	被動構文
受動分詞	被動形動詞
-no/-to に終わる非人称能動過去形	被動形動詞副詞形

1.4 ポーランド語について

ポーランド語は話者人口がおよそ4,800万人と推定されるポーランド共和国の公用語である。インド・ヨーロッパ語族スラヴ語派、西スラヴ語群に属している。ポーランド語は屈折語であり、副詞や前置詞、助詞など一部屈折しない品詞もあるが、基本的にはポーランド語の品詞は文中の機能や他の語との関係によって形を変え屈折している。動詞は人称と性、数、時制による活用があり、その他にもアスペクトや法によって形が変わる。

名詞は性、数、または7つの格によって曲用している。形容詞や数詞、または形容分詞も名詞に合わせて曲用する。本研究の内容と特に関係しているのは、文の主語（典型的には動作主、または経験者）がとる主格、直接目的語（対象）の格である対格と、間接目的語を表すのに用いられる（意味役割としては日本語の二格のように相手を表すことが多い）与格である。

ポーランド語には、英語などの欧米語と同様に、動詞から派生され、動詞の性格を保ちつつ形容詞などの他の品詞のように振る舞う分詞が存在している。ポーランド語学では *imiesłów* と呼ばれ、一つの品詞として立てられている。日本語では、「受動形容分詞」のように〇〇分詞という言い方と、「被動形動詞」のように〇〇動詞という言い方があるが、本稿では1.3.で述べたように、『ニューエクスプレス ポーランド語』（2008）に従って前者を用いることにする。

2 研究目的と方法

この研究は、頻繁にかつ幅広く使用される日本語の

受身をポーランド語の受身と対照し、ポーランド語における受動態使用の状況に影響を与える要因や両言語の特徴を探ることを目標としている。そのため、現代日本文学の代表者とも言える村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』日本語原文と、そのポーランド語訳である *Tańcz, tańcz, tańcz* を資料とし対訳コーパスを作成する。そのコーパスをもとに、日本語の受身に対応していると思われるポーランド語の形式を調べ、その特徴について述べる。さらに調査の結果によって明らかになった日本語の受動態の対応表現として考えられるポーランド語の受動表現の分析を行う。

2.1 資料選択

本論文は日本語を出発点とし、日本語と対照することによってポーランド語の受動態の使用状況やその他の受動表現の有無を明らかにすることを目標としているため、調査も日本語の受動文に対応するポーランド語の表現を調べるものとした。調査資料には、原文が日本語でポーランド語訳が存在するという作品として村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』を選んだ。現代の日本文学を代表作家による作品であること、600枚以上という多数の用例が得られそうな分量があること、経験豊富で高く評価されてきた Anna Zielińska-Elliott によるポーランド語訳が入手可能だったことが主な理由である。

2.2 研究方法

調査の第一段階では、写真やPDFの文字をテキストファイルとして電子化するためのプログラム、

ABBYY Fine Reader12によって原本の小説をテキストファイルに変え、テキストエディターサクラの検索機能を使い動詞ラレル形を抽出した。受身以外の例を排除し、エクセルファイルに張り付けていった。その際、受身は時制の表現などと異なりその影響を受けにくいと判断し、従属節と主節の動詞を区別しないことにした。それから原文と訳を見比べながら、同じくテキストファイルに変えたポーランド語訳の中から、日本語の用例に対応しているポーランド語の文を手作業で見つけていき、さらにエクセルファイルに張り付け

ていった。

そのようにして作成した日本語—ポーランド語対訳データに、ポーランド語対訳表現のタイプである、能動文、受動文、非人称文等のタグをつけて集計した。

3 調査結果

調査結果について見ていく。図1がそれぞれの対訳表現のタイプを、表2が用例数を示したものである。

図1 ポーランド語訳における対訳表現のタイプ



表2 『ダンス・ダンス・ダンス』における受動文のポーランド語訳における対訳表現の用例数

構文のタイプ	用例数
受動文	173
能動文：	320
一般的な能動文	296
oni 構文（能動態の特殊な構文）	24
-no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文	43
再帰代名詞 się による非人称文	4
意識（名詞表現など）	107
総 計	647

3.1 日本語の受動文がポーランド語に受動文で訳されるパターン

ポーランド語訳が受動文になっている例は 173 例あった。特に「殺す」「首を絞める」など、殺人を表すような動詞はポーランド語でも受身になりやすいようだ。(4)、(5) のような例である。

- (4) a Kiedy patrzy się na świat z tego punktu widzenia, odkrywa się, że dość dużo kobiet **zostaje zabitych-pchniętych nożem, zatłuczonych, uduszonych**.

become-3PL. kill-PASSIVE

push--PASSIVE by knife beat-PASSIVE strangle-PASSIVE

b そういう視点から世界を見てみると、世の中では結構沢山の数の女が殺されていた。刺し殺されたり、殴り殺されたり、絞め殺されたりしていた。

- (5) a Czy możliwe, że **Kiki została zamordowana?**

become-3.SG.PAST murder-PASSIVE

b キキが殺されてしまったという可能性はないだろうか？

ポーランド語の受動文は本来、連辞動詞（つまり be 動詞、ポーランド語の場合は być または zostać）と他動詞から作られる受動形容分詞で形成される。上記の (4) a や (5) a もそうだ。しかし、中には連辞動詞が使用されず、受動形容分詞のみ使われた文もある。その多くが (6) のように、原文の受身形動詞が名詞修飾節述語の場合である。ポーランド語でも受動形容分詞が名詞を修飾している。

- (6) a Starannie **wybrane** sprzęty, spokój i ciepła domowa atmosfera.

carefully choose-PASSIVE

b 選びぬかれた調度品、静けさ、温かみのある居住性

さらに、(7) のように、原文の動詞受身形が修飾節ではなく、主節の述語であるにもかかわらず、ポーランド語の文では分詞による名詞修飾になっている例も見られた。これは、現代ポーランド語における受動文のプロトタイプが話し手以外の世界を描写するような文であることを意味していると著者は捉えている。この問題については改めて次の節で考察する。

- (7) a Mei umarła. **Zamordowana**.

murder-PASSIVE-3.SG.FEM

b メイが死んだ。殺された。

3.2 能動文として訳されるパターン

対訳のパターンとして最も多かったのは、日本語の受動文がポーランド語訳では能動文になっているパターンだった。

無意志動詞以外すべての動詞に受身形があることが日本語動詞大きな特徴であるが、そもそも他動詞しか受身形を持たないポーランド語では、日本語の自動詞による受動文を受動文に訳しようがなく、能動文として翻訳された例が多いのも当然かもしれない。(8) や (9) がそのような用例である。

- (8) a Miałem wrażenie, że **patrzy** na mnie z odległości kilometra.

see-3.SG. at me-ACC

b 一キロメートルも向こうから見られているような気がした。

c [彼女が] 僕を一キロメートルも向こうから見ているような気がした³。

- (9) a Wszyscy mu **współczują**.

all-NOM him-DAT feel_sorry for-3.PL.

b 同情されるだけだ。

c みんながその人に同情するだけだ。

(8) a の述語の *patrzeć*（見る）は直接目的語⁴の格

である対格の補語を取ることもできるが、この例では対象物が前置詞の *na* と組み合わせられるため、他動詞と見なされず、また受身にもならない。(9) a の *współczuć* (同情する) も、与格をとる動詞であるため他動詞ではない。

しかし、原文の述語が他動詞なのに、能動文で訳されている例が多数ある。(10) ~ (12) がその例である。

- (10) a Dom Makimury **otaczał** wysoki plot z bramą w starym stylu, z daszkiem.

surround-3.SG.PAST fence-NOM

b 牧村家は高い板塀で囲まれ、門は屋根のついた昔風の造りだった。

c 牧村家は屋根のついた昔風の造りの門つきの高い板塀が囲んでいた。

- (11) a Te słupy światła były tak proste i wyraźne, jakby ktoś **wyciął** je nożem, i wypełniały pokój intensywnym blaskiem krajów południa.

somebody-NOM cut-3.SG.PAST

b その光の柱は刃物で切り取られたようにくっきりと鋭角的で、南国の太陽の激しさを部屋の中に送り込んでいた。

c その光の柱は誰かが刃物で切り取ったようにくっきりと鋭角的で、南国の太陽の激しさを部屋の中に送り込んでいた。

- (12) a **Zabrała mnie policja** i jestem przesłuchiwany w komendzie w Akasaka.

take-3.SG.PAST me-ACC police-NOM

b 警察につれてこられて取り調べを受けてる。

c 警察が僕をつれて取り調べを受けてる。

このような用例では、日本語の受動文では主語になっている対象が対格で出ている。つまり、同じ状況について述べる時に、日本語では動作対象を主語にし

た受動文として、ポーランド語では対象が補語のままの能動文として表現される。ポーランド語では能動表現を好む傾向が強いことを意味していると解釈しても良さそうだ。

3.3 特殊な能動文の例

原文の受動文から能動文に訳されるパターンの中には、一般的な能動文とは違う、やや特殊な用例がある。この問題については第4節で詳しく考察している。

3.4 意識の例について

本調査に用いられたデータの文学作品としての性質から、ポーランド語としての自然さや文体の美しさが重視されており、動詞述語で訳されない場合もあった。(13) a と b がそれぞれポーランド語訳とその原文であるが、原文における受動文の述語が、名詞表現に訳されている。このような用例は分析の対象から除外した。

- (13) a Byłem wyczerpany, miałem dość i odpowiadałem grzecznie na **wszystkie pytania**.

all question-PL.ACC

b 僕はくたくたになって、うんざりして、質問されたことは全部ちゃんと答えるようになっていた。

c 僕はくたくたになって、うんざりして、全ての質問にちゃんと答えるようになっていた。

4 分析

ここまで調査結果について見てきたが、やはり目立つのは、ポーランド語の翻訳における受動文の少なさである。原文の受動文の約3割しか受動文に訳されなかったのは、筆者の予測通りであって、ポーランド語では受動文の使用頻度が日本語よりずっと低いことを示唆している。

以下では、このような現状の要因や両言語において好まれる受動文のタイプについて考察する。

4.1 それぞれの言語において好まれる受身文の性質について

(14) a Kiedy ktos **mi** robi wyrzuty, załamuję się.

somebody-NOM me-DAT attac-3.SG.

b あまり責められると、私駄目になっちゃうの

(6) a Starannie **wybrane** sprzęty, spokój i ciepła domowa atmosfera.

choose-PASSIVE

b 選びぬかれた調度品、静けさ、温かみのある居住性

ポーランド語においては、受動形容分詞は述語よりも名詞修飾のために用いられやすく、(6) aのように、受動形容分詞の用法の方がむしろ落ち着きがいいというのが母語話者の直観である。この問題についてさらなる研究が必要だと思われるが、名詞修飾で分詞のみで形成されている受動表現が今回の調査で多くみられたのも筆者の仮説を裏付けるように思われる。典型的なポーランド語の受動文は主に外の世界の描写をするために用いられ、日本語の受動文は視点を一致させるために用いられることが多いと思われる。

このように、日本語とポーランド語では、好まれる受身文のタイプも違うのだが、タイプに関わらず、そもそも受身がポーランド語では好まれないのが事実であり、日本語との大きな違いなのだ。ここで改めて、このような現状の考え得る要因について考察してみよう。

4.2 受身文がポーランド語において用いられにくい要因

第一に、ポーランド語における受身形に対する文法

的な制限に言及すべきであろう。ポーランド語の受動文は連辞動詞 (być あるいは zostać) と受動形容分詞から成る (受動形容分詞のみを形容詞のように使う場合もある) のだが、そもそも受動分詞を作るのは、他動詞のみだ。(15) が受動文、(16) が能動文になっているのはそのことで説明できる。原文中に頻繁に出現する「言われる」や「思われる」もほとんどの場合能動文として翻訳されているのもそのためだろう。しかし、(17) のように、受動形容分詞が存在するにもかかわらず ((17) d 参照)、能動文に翻訳された文もある。

(15) a Wspaniałego pałacu. **Zebrane są** w nim bogactwa całej Afryki.

collect-PASSIVE-3.PL be-3.PL

b きらびやかな宮殿。アフリカ中の富がそこに集められている。

(16) a Żona ode mnie **uciekła**.

run away-3.SG.PAST

b 「奥さんに逃げられたんだ」

c 「奥さんが僕から逃げたんだ」

(17) a Całe niebo **pokrywała** warstwa chmur.

sky-ACC clothe-3.SG.PAST

b 空は相変わらず端から端までどんよりとした雲に覆われていた。

c 空は相変わらず端から端までどんよりとした雲が覆っていた。

d Całe niebo **było pokryte** warstwą chmur.

sky-NOM be-3.SG.PAST clothe-PASSIVE

(17) c 及び d は筆者作例

ポーランド語で受動文より能動文が好まれるのは事実であり、筆者の調査でも明らかになったことだ。この言語事実に、どのような要因があるのだろうか。筆者は主に三つの要因があると考えているが、これからそれぞれについて考察していく。

4.3 両言語の性質：視点重視の言語と主語述語関係重視の言語

まず一番に考えられる要因はポーランド語と日本語の言語体系や特徴、つまり言語そのものの性質である。両言語とも主語省略可能な言語であり、実際に母語話者の発話において主語が頻繁に省略される。この主語の省略を可能とする両言語の性質は、受身の使用とも深く関わっている。

屈折語であるポーランド語は、動詞は主格と一致して動作主（または経験者など）の性や数まで表している。そのため、たとえ主語が抜けていても、動詞の形態から主語の情報が読み取れる。したがって、主語省略は一般的な発話では全く問題にならない。それに対して、人称や数によって動詞形態が変わらない日本語では、言語経済性の面から好ましい主語諸略を可能にするには、常に話し手の視点を保つ必要がある。そのため、ポーランド語では絶対的なものではない視点一致の原則が日本語では非常に大事になる。視点一致の方法として頻繁に使われるのが、まさに受身である。したがってポーランド語母語話者が何の違和感も覚えない(18) aのような文は日本語では不自然となってしまう、(18) cや(18) dのように表現される傾向がみられる。

(18) a Powiedział mi coś dziwnego.

tell-3.SG.PAST me-DAT something-ACC strange

b (彼が) 私にとっても変なことを言った。

c (彼に) とっても変なことを言われた。

d (彼が私に) とっても変なことを言ってきた。

(18) は筆者作例

このような受身の用法は日本語では一般的だが、視点一致が原則ではない言語を母語とする日本語学習者にとってはやはり馴染みが薄いようだ。張(2001)は、中国語を母語とする日本語学習者の発話に視点一致原則の違反による誤用が見られると指摘している。本調査ではポーランド語を母語とする日本語学習者の発話

分析には至らなかったが、ポーランド語母語話者にも同じ傾向がみられると予測される。

本稿の調査対象となった『ダンス・ダンス・ダンス』にも視点一致のために用いられていると思われる受身文が多くみられた。(19)や(20)のような文だが、ポーランド語には以下の例文が示す通り能動文として訳される傾向が強い。

(19) a 僕は彼女の中にある何かしら真っすぐなものにとっても強く引かれていた

b Bardzo pociągała mnie jej bezpośredniość.

attract-3.SG.PAST

c *彼女の中にある何かしら真っすぐなものが僕をとっても強く引いていた

(20) a 彼女に僕の嫉妬を見破られそうで、怖かったのだ。ねえ、あなたスイミング・スクールに嫉妬しているんでしょう？

b Bałem się, że przejrzy mnie na wylot i powie: „Jesteś zazdrosny o lekcje pływania!”

see through-3.SG.FUT

c 彼女が僕の嫉妬を見破りそうで、怖かったのだ。ねえ、あなたスイミング・スクールに嫉妬しているんでしょう？

もちろん、視点一致の方法は、受身だけではない。授受動詞や(18) dのように「～てくる」など、様々な形式が使われる。

4.4 名詞句階層にみられる動作の方向性による制限

第二の要因としては、ポーランド語と日本語の母語話者の間にあると考えられる名詞句階層認識のズレである。

名詞句階層とは、Silversteinによる名詞の分類であるが、Silversteinはただ名詞をグループに分類しただけでなく、そのグループがなしているハイアラーキー

も表した(図2参照)。Silversteinによる名詞句の階層は一般的にどの言語にも通用されと考えられ、名詞句が話し手にとってどれくらい身近なものであるか、どれくらい話題になりやすいかを表していると考えられている。つまり、Silversteinのハイアラーキーで上になっているグループの名詞ほど話し手にとって身近で重要であり、話題になりやすいと考えられているのだ。

Silversteinの名詞句階層は世界の様々な言語において多くの文法的現象に反映されていることが、Silverstein自身や角田(2009)によって明らかにされている。それらの現象と同じく、Silversteinの名詞句階層は、態(受動文になりやすい程度)にも影響していると思われる。角田(2009)は日本語の例を使ってそれを証明している。

以下、日本語と対照しながらポーランド語における話し手の態の選択とSilverstein名詞句階層について考えていく⁶。ただし、この節の例文は、特記されない限り全て角田(2009; pp. 41-65)からの引用であり、そのポーランド語訳は筆者が行った。

4.4.1 Silversteinの名詞句階層と態：日本語

角田(2009)が指摘したように、日本語では動作主が対象より高い名詞句階層に属している場合、つまり動作が上から下へと向かっている場合(例21-23)

は能動態に、反対の場合は受動態になりやすいとされている。

動作の方向性：上→下

(21) 私は女を殺した。(1人称と人間名詞)

(22) 女は熊を殺した。(人間名詞と動物)

(23) 花子は焼芋を食べた。(固有名詞と無生物名詞)

動作主が対象より上のグループである場合に受動態を使ってしまうと、(24)、(25)、(26)のように不自然な文となる。

(24) ?女は私に殺された。(1人称と人間名詞)

(25) ?熊は女に殺された。(人間名詞と動物)

(26) ?焼芋は花子に食べられた。(固有名詞と無生物名詞)

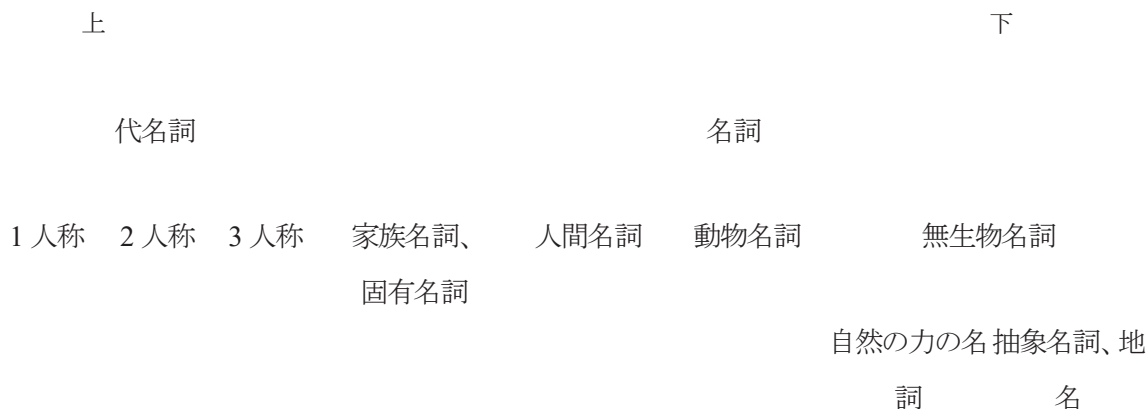
動作の方向性：下→上

(27) 私は大波にさらわれた。(無生物名詞と1人称)

(28) 海辺さんは仕事に追われている。(無生物名詞と固有名詞)

(27)(28)では動作がSilversteinの名詞句階層でいうと下から上へと向かっている、つまり、被動作主の方が階層が上である。このような場合は、日本語では通常、受動態が使われ、(29)、(30)のような能動文

図2 シルバースティーンの名詞句階層(角田による修正を加えたもの)



は不自然とされる。

(29) ? 大波は私をさらった。(無生物名詞と1人称)

(30) ? 仕事が海辺さんを追っている。(無生物名詞と固有名詞)

4.4.2 ポーランド語における名詞句階層と動作の方向性

ポーランド語でも、日本語と同じように、上から下へ向かっている動作の場合は、能動態が選ばれる傾向が強く、受動態は不自然だと考えられる。

動作の方向性：上→下

(31) Zabiłem kobietę.

kill-1.SG.PAST women-ACC

(32) ? Kobieta została zabita przeze mnie.

women-NOM become-3.SG.PAST kill-PASSIVE by me-ACC

(33) Kobieta zabiła niedźwiedzia.

women-NOM kill-3.SG.PAST bear-ACC

(34) ? Niedźwiedź został zabity przez kobietę.

bear-NOM become-3.SG.PAST kill-PASSIVE by women-ACC

また、動作が下から上に向い非動作主が話題になっている場合など、適当な文脈であれば、受動態になることがある。

しかし、例(35)–(38)が示すように、日本語では基本的に受動態しか認められない下から上へと向かっている動作の場合は、ポーランド語では受動態、能動態とも自然とされている。このようにポーランド語と日本語の間には名詞句階層に関する認識のズレがあると考えられる。

動作の方向性：下→上

(35) Porwała mnie fala.

sweep off-3.SG.PAST me-ACC wave-NOM

大波は私をさらった。

(36) Zostałem porwany przez falę.

become-1.SG.PAST sweep off-PASSIVE by wave-ACC

私は大波にさらわれた。

(37) Praca przytłacza pana Umibe.

work-NOM overwhelm-3.SG mister Umibe-ACC

仕事が海辺さんを追っている。

(38) Pan Umibe jest przytłoczony pracą.

mister Umibe-NOM be-3.SG overwhelm-PASSIVE by work-ACC

海辺さんは仕事に追われている。

つまり、ポーランド語では、動作の方向性によって受動態は制限を受けるのだが、能動態は動作主・非動作主の階層を問わずどのような場合でも使えることが、以上の例文によって明らかになったと言える。

4.5 動作主の脱焦点化表現

受身が幅広く頻繁に使われる日本語と違って、ポーランド語では受動文の使用が比較的に少ないことには、日本語の受動文と似たような機能を他の構文が果たしていることも関係していると思われる。筆者の調査でも、-no/-to に終わる非人称能動過去形や再帰代名詞 się による非人称文が日本語の受動文に対応していることが明らかになった。これからは、それぞれの非人称文について、詳しく見ていこう。

4.5.1 非人称文

非人称文とは、主語を持たない文である(Wierzbicka, 1961)。動詞では動詞の人称・性・数を支配する主語が存在しないので動詞が一つの形にしかない。上述のいわゆる -no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文では述語動詞が非人称能動過去形の形となり、再帰代名詞による非人称文の場合は単数3人称の動詞活用形となる(なお、単数3人称で表されるからといって、一人の人間が動作主であるというわけではない)。動作主の脱焦点化が非人称文の最も基本的な性質であり、その点で受動態と共通の性質を有する。

4.5.1.1 再帰代名詞 się による非人称文

再帰代名詞 się による非人称文は、先述したように、動詞の単数 3 人称形に再帰代名詞の się がついて作られる。się との組み合わせによって非人称文を形成できる動詞には制限がないのだが、się の重複ができないため、再帰相などの się がすでにある場合は、さらなる się が付加できず非人称文にならない。また、意味的に日本語のテイルのように継続を表している場合が多いため、完了体の動詞は再帰代名詞による非人称文になりにくいと思われる。ただし、それは絶対的な規則ではない。

意味の面ではまず大きな特徴として、不特定多数の人間の動作主がいることを含意していることが挙げられる。例えば (39) a のような文は非文である（人間が草をたくさん食べているなど、よっぽど特殊な文脈が与えられない限りなのだが）。

(39) a *Na tym pastwisku je się dużo trawy.

on this grass-land eat-3.SG SELF much grass-GEN

b この牧場では、草をたくさん食べている。

／草がたくさん食べられている。

(39) は筆者作例

一般的な傾向、習慣などを表す意味合いが強いのも再帰代名詞 się による非人称文の特徴であり、そのため場所・時間の副詞と一緒に使われることが多い。(40) a がそのような典型的な用法を示している。

(40) a U mnie w domu zawsze wstawało się wcześnie.

at my place always get up-3.SG.PAST SELF early

b 私の家ではいつも早く起きていた（ものだ）。

(40) 例は筆者作例

調査の際扱った資料にも、再帰代名詞 się による非人称文がみられた。以下に一例だけ示しておく。

(41) a Tego się ode mnie oczekuje.

this-ACC SELF from me-GEN expect-3.SG

b そうというのが僕に求められている。

4.5.1.2 -no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文

-no/-to に終わる非人称能動過去形は受動形容分詞と同様に、動詞の過去三人称単数男性形から作られる。アスペクトとは関係なく、完了体の動詞からも、完了体の動詞からも、また się の付いた動詞からも形成される。

再帰代名詞 się による非人称文と同様に、-no/-to に終わる非人称能動過去形も、複数の人間動作主による動作を表している。ただし、過去の事態しか表せないという大きな制限がある。また、再帰代名詞 się による非人称文と異なり、習慣など動作の継続を表す意味合いがない。

文体の面では、再帰代名詞 się による非人称文は中立的でフォーマルともインフォーマルとも言えるのだが、-no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文の文体は母語話者にとってやや硬く、文学的な表現に感じられる。今回の調査において、-no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文の方が再帰代名詞 się による非人称文より圧倒的に多かったのも、文体の問題と関係しているだろうと解釈される。(42)、(43) が -no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文として翻訳された例である。

(42) a Przyniesiono drinki.

bring-PAST drink-PL.ACC

b 飲み物が運ばれてきた

(43) a Zabito ją w hotelu, prawda?

kill-PAST she-ACC in hotel-LOC

b ホテルで殺されたんだろう。

このような非人称文がポーランド語で卓越している

要因として、(-no/-to に終わる非人称能動過去形による非人称文には過去形しか表せないという制限はあるものの) 受動形容分詞のように他動詞からしか作られないという厳しい制限がないことや、動作主の非焦点化という点で受動文と類似していても受動文では主格になり目立ちやすくなる動作の対象が対格のまま出ており焦点化されないことが考えられる。

このように、ポーランド語において非人称文は、受動文が受けるような制限に縛られることなく、動作主脱焦点化の点で受身と共通しているため、受動文に代わって似たような機能を担う傾向にある。しかし、動作主脱焦点化という受身の第一機能を果たすことは、非人称に限ったことではなく、能動文でも主語が不特定なら可能になる。そのような不特定主語の能動文は、今回の調査でも見られた。能動文を好むポーランド語らしいともいえるこの現象について次の節で説明する。

4.5.2 不特定主語の能動文

受身の第一の機能は、動作主の脱焦点化であると考えられている。

(44)a 「ねえこんなに激しく求められたのって初めて」とユミヨシさんは言った。

b Po raz pierwszy **ktoś** mnie tak **potrzebuje**.

somebody-NOM need-3.SG

c 「ねえ誰かがこんなに激しく私を求めているのって初めて」

(44)を見ると、日本語の文では、動作主が表示されておらず、話し手の「ユミヨシさん」が誰に求められているかは明示されていないのだが、文脈によって求めているのは主人公の「僕」(この会話の相手)であることがわかる。誰が求めたかに関係なく、ユミヨシさんが求められたという結果状態が大事なわけで、動作主は特定の人物であってもこの文では脱焦点化されている。それに対してポーランド語訳は能動文に

なっているのだが、述語が *potrzebować* という、日本語の「求める」にあたる動詞である。この「求める」(*potrzebować*) という動作の動作主が「ユミヨシさん」の話し相手の「僕」であることは文脈でわかっているのだが、受動文で主語が脱焦点化されている原文のニュアンスを表現するために、特定の人物を主語にすることはできず、翻訳者が別の方法を考えなければならなかった。また、*potrzebować* という動詞は生格を取る二項動詞で、他動詞ではないため、そもそも受動文にするという選択肢がない。そこで、*ktoś* (誰か) という不特定の主語を持つ能動文になったと考えられるのだ。

(45)a „Człowiek z dobrym gustem" jest w nim synonimem „zwariowanego biedaka". **Wszyscy mu współczują**.

all-NOM

feel sorry-3.PL

b そこでは『趣味が良い人』というのは『ひねくれた貧乏人』というのと同義なんだ。同情されるだけだ。

(45)でも同様に、不特定多数の *wszyscy* (みんな) が主語になっていることが能動文のままだ動作主が脱焦点化に繋がっている。このようにポーランド語において、受身の第一機能である脱焦点化を表すには、受動文や非人称文のみならず、不特定主語の能動文も使われている。これはやはり、ポーランド語では能動文が好まれる傾向にあり、形もバリエーション豊かで意味的にも様々な機能を果たし得ることを意味していると言えそうだ。

不定主語として出現するのは、*ktoś* (誰か)、*wszyscy* (みんな)、*ludzie* (人々) または否定表現である *nikt* (誰も) などの単語が典型的だが、動作主脱焦点化型の能動文として、もう一つやや特殊な構文がある。それは、複数三人称の主語を持つ *oni* 主語の能動文である。

4.5.3 oni 構文

まず例を見てみよう。

(46)a 「警察に呼ばれた」と僕は説明した。

b **Wezwali** mnie na policję - wyjaśniłem.

call-3.PL.PAST me-ACC to police-ACC

c **Zostałem wezwany** na policję. (警察に呼ばれた。)

become-1.SG.PAST call-PASSIVE to police-ACC

d **Policja** mnie wezwała. (警察が僕を呼んだ。)

police-NOM me-ACC call-3.PL.PAST

(46) cd は筆者作例

この文は、主人公「僕」が警察に呼ばれ、取り調べを受けた状況を説明している。「呼ぶ」に当たるポーランド語の動詞 *wezwać* は、他動詞であるため「警察に呼ばれた」という受動文を (46) c のように訳しても差し支えがないはずである。また、能動文として訳すにしても、呼んだのが警察だったはずなので (つまり「警察によって呼ばれた」わけだ)、(46) d のように翻訳するのも可能である。しかし実際には (62) c でも (46) d でもなく、(46) b のように表現されている。

文中には出てこないのだが、この文の主語は複数 3 人称の代名詞 *oni* である。この「彼ら」を意味する *oni* はこの場合、特定の人物ではなく、不特定多数の人間のことを指す。

このような *oni* を主語とした構文は、不特定の人物 *oni* によってなされた動作によって対象が何等かの悪影響を被る場合に使われることが多い。この点では「*oni* 構文」は迷惑の意味を表す日本語の間接受身とよく似ている。迷惑受身の典型例とも言える「財布を盗まれた」という日本語の受動文に関しても、ポーランド語訳として最も相応しいのは (47) b のような「*oni* 構文」である。

(47)a 財布を盗まれた。

b **Ukradli** mi portfel.

steal-3.PL.PAST me-DAT wallet-ACC

以上 (46) c, d と (47) a, b は筆者によるもの

意味的には被害を被るニュアンスが強く、形態的には複数 3 人称の主語 *oni* が常に省略されるというのが「*oni* 構文」の特徴である。動作主が非焦点化されている点では非人称文にも近いのだが、形態的には能動態であるため、文法的に制限されることはない。文体の面ではくだけた表現であり、母語話者にとって使いやすい、実際に日常会話でよく耳にする表現である。今回の調査でも、小説という日常会話とは異なる文体だったにも関わらず、24 件もの「*oni* 構文」が見られた。筆者が把握している限り、先行研究においてはこの構文と受動構文や非人称文との類似性が注目されてこなかったのだが、能動態でありながら動作主の脱焦点化という点で受動態に近い点や、日本語の迷惑受身と (ポーランド語の受動文や非人称文を考慮に入れても) 一番よく似ている点から、さらなる研究の可能性が潜んでいる、非常に面白い形式であると思われる。

5 結論

本稿では、小説の対訳コーパスを用いて日本語の受動文とポーランド語における対応表現について調べ、考察してきた。ポーランド語の受動態に限らず、様々な言語形式を日本語の受動態と対照しながら分析することによって新たな観点が得られ、ポーランド語学ではあまり注目されてこなかった言語事実が見えてきた。本研究の成果は、次の 4 点に集約される。

1. 幅広く頻繁に受身が用いられる日本語に対して、ポーランド語では能動表現を好む傾向が強い。コーパス調査の資料として使用された『ダンス・ダンス・ダンス』の日本語原文には 647 件の受動文がみられ、ポーランド語訳 *Tańcz, tańcz, tańcz* における対応する箇所には合計 193 件の用例しかない。

かった。

2. このような言語事実には様々な要因があると考えられるが、本論文では主に次の三つを問題視してきた。

- a.) 両言語の性質：視点重視型の日本語と述語－主語の関係重視型のポーランド語

日本語は、視点一致の原則が重視されるため、視点一致のための受身の使用がよく見られるが、述語の語形変化によって主語が省略されていても明確であるポーランド語では、視点一致が絶対的な原則ではなく、このような受身の用法もみられない。逆に、好まれる受身のタイプとしては、名詞修飾節におさまっており、話し手以外の世界を描写するために使われる受動形容分詞の用法がある。

- b.) 両言語における名詞句階層の認識のズレ

- c.) 受動文以外の受動表現の発達

3. ポーランド語では受動文が好まれない傾向にあるのだが、代わりに動作主脱焦点化という点で受動態と似たような機能を持つ非人称文が卓越している。本論文では主に再帰代名詞 *się* による非人称文と *-no/-to* に終わる非人称能動過去形による非人称文について考察した。

4. さらに、非人称文のみならず、受動態と共通性を持つと思われる能動文のタイプにも目を向け、一つの受動表現として不特定主語の能動文を提案した。動作主脱焦点化という点と、対象が悪影響を与えられるという点で日本語の迷惑受身と非常に似ている複数三人称形の動詞を述語とする不特定主語の能動構文を「*oni* 構文」と提唱した。この「*oni* 構文」と日本語の迷惑受身の類似性に関しては、さらなる研究の可能性が期待できると思われる。

注

- 1 ニ格目的語を持つ「噛み付く」のような動詞を他動詞としてみなすかどうかについては、研究者の間意見が一致しないのだが、ここでは他動詞とみなすことにする。
- 2 ただし「雨に降られた」など、例外もある。動詞の分類については庵 (2012) 参照。
- 3 全ての例文ではないが、原文の受動文が受動文以外の表現 (能津文など) に翻訳されている場合は原文の日本語以外、(例文番号) c として翻訳文の筆者による日本語訳をつける。
- 4 ポーランド語では、英語と同様に、基本的には対格をとる、つまり直接目的語を持つ動詞のみが他動詞と見なされる。
- 5 特記がない限り例文は全て『ダンス・ダンス・ダンス』とそのポーランド語訳 *Tańcz, tańcz, tańcz* からの引用だが、太字と下線は筆者によるものである。
- 6 代名詞について、そもそも日本語には代名詞がないという主張もあり様々な立場で議論がなされてきた。本稿の領域を超える問題だが、本稿では、話し手自身を表す単語が、代名詞であろうとなかろうと他の人間を指す単語より階層が上であるという立場を取る。
- 7 *Żyć* (生きる) など、*-no/-to* に終わる非人称能動過去形にならない動詞もあるが、僅かである。

資料

村上春樹 (1988) 『ダンス・ダンス・ダンス』 講談社

Murakami, Haruki, *Tańcz, tańcz, tańcz* (tłum. Anna Zielińska-Elliot) MUZA SA, Warszawa 2013

参考文献

- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析 中国語母語話者の母語干渉 20 例』 スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論 (日本語叢書)』 大修館書店
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門』 スリーエーネットワーク
- 石井哲士朗, 三井レナータ (2008) 『ニューエクスプレス ポーランド語』 白水社
- 伊藤英人・浦田和幸・黒澤直俊・箕浦信勝編『語学研究所論集』 17 号 東京外国語大学語学研究所
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 言語と認知の接点』 くろしお出版
- 川村大 (2012) 「受身文研究の二つの立場——研究史の構造的な理解のために——」『国語と国文学』 88 巻 9 号
- 川村大 (2012) 『ラル形述語文の研究』 くろしお出版
- 金俣呈 (2011) 「自動詞の受身文の言語形式上の特徴について — 受身文の主語と文中の諸要素との関係を中心に」東京外国語大学日本課程・留学生課共編『日本研究教育年報』 15 pp. 1-16
- 金俣呈 (2012) 「言語活動を伴う事柄を表す動詞の主語受身文について — 主語と補語との意味的な関連性という観点から」東京外国語大学日本課程・留学生課共編『日本研究教育年報』 16 pp. 45-58
- 木村彰一・吉上昭三 (1973) 『ポーランド語の入門』 白水社
- 岸本秀樹 (2005) 『柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集 日英語対照研究シリーズ (8) 統語構造と文法関係』 くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 くろしお出版から復刊 (1972)
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 (2000) 『日本語の文法 1 文の骨格』 岩波書店
- 崎山理・佐藤昭裕 (1990) 『アジアの諸言語と一般言語学』 三省堂
- 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』 くろしお出版
- 志波彩子 (2006) 「会話文テキストにおける受身文の行為者の現れ方について—構造的タイプとの関係で」東京外国語大学日本課程・留学生課共編『日本研究教育年報』 10 pp. 1-24
- 志波彩子 (2009) 「認識動詞の非情主語受身文—「見られる」「思われる」「言われる」呼ばれる」を中心に」東京外国語大学日本課程・留学生課共編『日本研究教育年報』 13 pp. 1-24
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1982) 『言語の構造 理論と分析 意味・統語篇』 くろしお出版
- シェラツカ=バジュル、ボジェナ・石井哲士朗 (2006) 『Z uśmiechem po polsku 微笑んでポーランド語 第一部』 東京外国語大学生協同組合出版部
- 高見健一 (1995) 『柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集 日英語対照研究シリーズ (4) 機能的構文論による日英語比較』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 くろしお出版
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版

ポーランド語の文献

- Doros, Aleksander, *Werbalne konstrukcje bezosobowe w języku rosyjskim i polskim na tle innych języków słowiańskich*, Zakład Narodowy imienia Ossolińskich Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk, Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk 1975
- Kaleta, Zofia, *Gramatyka języka polskiego dla cudzoziemców*, Uniwersytet Jagielloński, Kraków 1995
- Z. Klemensiewicz, T. Lehr-Splawinski, S. Urbańczyk, *Gramatyka historyczna języka polskiego*, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa 1955
- Klimonow, Włodzimierz, *Aspekt i czas w konstrukcjach imiesłowowo-biernych w języku polskim*, PJ 1959, nr 3-4
- Klimonow, Włodzimierz, *Konstrukcje imiesłowowo-bierne z imiesłowem niedokonanym w języku polskim*, PJ 1960, nr 5
- Klimonow, Włodzimierz, *Uwagi o kategorii strony we współczesnej polszczyźnie literackiej*, PJ 1962, nr 7-8
- Kuraszkiewicz, Władysław, *Gramatyka historyczna języka polskiego*, Państwowe Zakłady Wydawnictw Szkolnych,

Warszawa 1972

Nagórko, Alicja, *Zarys gramatyki polskiej*, PWN, Warszawa 1996

Oesterreicher, Henryk, *Imiesłów bierny w języku polskim*, Polska Akademia Umiejętności, Kraków 1926

Przygoda, Marian, *Predykatywne konstrukcje syntaktyczne z imiesłowem biernym dokonany we współczesnym języku rosyjskim w aspekcie porównawczym z językiem polskim*, Wyższa Szkoła Pedagogiczna w Zielonej Górze, Zielona Góra 1976

Rospond, Stanisław, *Gramatyka historyczna języka polskiego*, PWN, Warszawa 1973

Saloni, Zygmunt, *Cechy składniowe polskiego czasownika*, Zakład Narodowy im. Ossolińskich, 1976

Stieber, Zdzisław, *Z problematyki polskiego czasownika*, JP 1973 nr 2-3

Szliferszteinowa, Salomea, *Bierne czasowniki zaimkowe (reflexiva) w języku polskim*, Zakład Narodowy imienia Ossolińskich Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk, Wrocław – Warszawa – Kraków, 1968

Śmiech, Witold, *Funkcje aspektów czasownikowych we współczesnym języku ogólnopolskim*, Łódzkie Towarzystwo Naukowe, Łódź 1971

Tokarski, Jan, *Fleksja polska*, PWN, Łódź 1978

Wierzbicka, Anna, *Czy istnieją zdania bezpodmiotowe*, JP 1961, nr 1